

Wayne Fife 2020 Chap.1 The Reliability Issue. In *Counting as a Qualitative Method: Grappling with the Reliability Issue in Ethnographic Research*. Palgrave. pp. 1–21

ファイフ・ウェイン 2020 第一章「信頼性の問題」『質的方法としての集計：民族誌的研究における信頼性の問題への取り組み』

解題：パプアニューギニアで長く調査をしてきた人類学者のファイフ自身が、かつてから感じていた質的方法の信頼性への不安と、それをどのように解決したのかについて、自身のこれまでの研究に即して論じている。第一章では、自身が考案した質的に「集計する」方法の意義を論じている。

## 問題 (p.2)

・民族誌的な研究の主要な関心である信頼性の問題：民族誌的な方法（参与観察、インタビュー、自己報告、etc...）で集めた情報が信頼しうるものとなる時をいかに知りうるのか。

- いくつかの質的調査のチェックの方法が提示されてきているが、そのうち2つを挙げる。

①「三角測量 (triangulation)」：それぞれの重要な解釈（結婚のパターン、経済実践、コスモロジーなど）において2つ以上の情報収集の方法を用いている。あるいは、他の研究者の同一現象への見解も参照。

②飽和 (saturation) アプローチ：説明が信頼性のレベルに到達することを保証するために、研究者が常に集められた情報を同じカテゴリーやテーマの中で帰納的に比較する。トピック（名づけの実践、冗談のふるまい、特定の宗教儀礼、etc...）について新しい情報が出なくなるまで作業を続ける。完全に達成されることはない。

・どちらを用いるときも、研究対象の集団の様々な成員の間で、矛盾や非同意についての記録を含む。このようなやり方でのみ、生の異質な様式のニュアンスに富んだ描写をすることができる。

- 長期の調査によって、抑制と均衡が働き、信頼に足るものとなる。(p.3)

・方法論的な反省の形式は著作物の検査の役目もはたす。

- 研究者は研究のプロジェクトを通じて自身が行うことを記録し、のちに他者が監査できるようにする。この考えは他者による追跡可能性を前提とする。

- これに対して、再現性よりも、読者にとって、だれがどのように行ったのかが明確であることが重用だとする見解もある。

・著者の立場は、信頼性や有効性は、あるかないかという二者択一として見られるべきではないということだ。

- 「有効性は目的や状況に相対的なもの」
  - 著者の提案は、研究と分析の両方のレベルで、集計（counting）を基準となる質的プロジェクトの中に含めていくことである。これは数字が散文よりも価値があるという意味ではない。質的な集計は他の質的な方法と共に用いられる。
- ・著者のキャリアに即した信頼性に関する考察
- ・修士：老人ホームで8か月のフィールドワーク（p.4）
- テーマ：かつて個人の自立という文化的な信念を持っていた人々が、今のホームでの依存した生活にどのように対処しているか。
  - 方法：参与観察やイベントの分析、構造化、半構造化インタビュー
  - 結果：住居者は、公営のホームを、かつての自身の家のように、そして職員を家族としてみなしていることが明らかになった。このことは、住居者は援助が必要な受動的な存在である、といったそれまでのネガティブな見方を除去するものであった。
- ・しかし、住居者の発言を信頼しすぎて、実際の振舞いを十分に調査していないという不安もあった。
- 自分の分析の正しさをいかにして知ることができたのか。
  - 「三角測量」や飽和アプローチは助けになったが、別の検査手段も必要であると感じていた。
- ・博士：パプアニューギニア（PNG）のニューブリテン島でのフィールドワーク（p.5）
- テーマ：正規教育と社会変化、文化的継続性の関係
  - 1980年代にPNGの人々の多数は、6年かそれより短い正規教育を受けていた。
  - 関心：最初の6年の過程と地域の学校が、家族や社会にもつ影響
- ・都市の2つの学校と1つの田舎の学校を対象に調査を行った。（インフォーマントは26人の教師、3人の管理者、地域の首長、教育行政官、民間職員、親など。）教師と親の対立や、教育行政の職員の見解の違い、学校に失望して辞めた生徒の話といった情報を手にした。P.6
- ・6、7カ月後には、どのようなイシューについて当事者が注意を払っているのかについて見当をつけていた。しかし、自分の理論的なバイアスがあるのではないかと思い、暫定的な結論をチェックする必要があると感じていた。
- 「隠されたカリキュラム」という理論に傾倒していた（：公的なカリキュラムの運用の中で、教師が算数や理科の質問で男子生徒を女子生徒よりも優遇する、よい生徒を教室の前方の席につかせる、特定の生徒だけを訓練する、など）。
  - 「隠されたカリキュラム」は教室の外でも確認することができる（教員と保護者の

会議、休み時間の生徒同士の遊び、など)。p.7

・著者は「隠されたカリキュラム」のいくつかの動向を同定していた。しかし、それは正しいといえるのか？

- 「隠されたカリキュラム」の提案者は、動画をとってそれをミクロに分析することを推奨していた。しかし、著者は当時、ビデオカメラを持っていなかった。
- さらに、著者は研究を他の研究者だけではなく、教員や教育行政官、さらには将来同一のことを研究する人にもアクセス可能な方法を求めている。

・この時にひらめきとなったのが、カナダの人類学者の「疑わしい時は、集計せよ」という言葉だった。

### 解決の始まり (p.8)

・最初に確かめたのは、3つの学校のすべての学年で目撃した振舞いの形式である。これを「ある種の規律訓練」としてコード化し記録していった。するとその中でもいくつかのパターンがあることが明らかになってきた。そして、それが低学年から高学年にかけて変化するようにも見えてきた。著者は、訓練の行動の特定の形式を集計することに思い至った(詳細は第二章)。これは、これまで集めた情報を新しいやり方で考察し、パターンを認識する助けとなった。

・この方法論は別の研究でも役立った。(p.9)

- ポストドクでは、ロンドン大学 SOAS のアーカイブでの、PNG の初期の教育システムを形成した宣教についての研究を行った。
- 資料から、教室で記録していた規律訓練の形式の多くに道徳的な裏打ちがあることを認識した。また教員のカレッジは9分の8が宣教師によって建てられていた。このことから、キリスト教に由来する道徳と、表面上は世俗的なニューブリテン島の学校における、教師による規律訓練の関係について主張することができた。

・「集計スケジュール」という方法の提案：特定のふるまいをコード化して、ある状況ごとに期間を設定してそれを数え上げる。その目的は複数の教室間の比較をするため。(p.10)

- 集計スケジュールにおける集計は統計調査におけるランダムサンプリングとは異なる。理想的にはすべての授業を記録することが望ましいかもしれないが、同じカリキュラムを教えているという点で、学年別に比較しようとしても教員が異なるという要素が出てしまうため、ランダムサンプリングの様な厳密な設定ができない。それゆえ、「集計スケジュール」という質的調査法がよいという判断に至った。

- ・集計は、しばしば統計的な分析よりも科学的ではない、とみなされることもある。しかし、常にそうであるわけではない。
  - PNG の様な国では政府統計があり、研究者はそれを利用しがちである。例えば、首都のポートモレスビーで、教育省や他の政府系機関の統計情報は有益だった。(p.11)
  - しかし、ニューブリテン島に関しての統計は信頼に足らないと思わせる場面（：学校の職員が実際とは異なる出席記録を提出したり、望まれる報告を忖度して書いた）に遭遇した（＝統計の数字そのものが集計される時の不正確さ）。(p.12)
  
- ・それゆえ、「集計スケジュール」という質的な方法が成果を出すこともある（この方法の詳細については次章以降）
  
- ・分析ソフトウェアの使用について (pp.13-18)
  - 80年代から質的データ分析のプログラム（Qualitative Data Analysis: QDA）が登場してきている。うまく使えば役に立つこともあるだろうが、推奨はしない。
  - 様々な批判がすでにあるが、いくつかを取り上げる。
    - ①グラウンデッドセオリーアプローチに基づいている：情報の組織化において実証主義者的なバイアスが強い。
    - ②QDA の使用過程自体に透明性がない。
    - ③複雑で雑多な研究過程をコンピュータ的な整理棚に押し込んでしまう。その結果生産的でない結果が出ることもある。
  
- ・したがって、ソフトウェア自体よりも質的研究の分析の手順に習熟することが大事。